

## 道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和5年度 第2号 2023年11月27日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

### 令和5年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」および釧路水試「北辰丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2023年11月13～16日（刺し網漁獲物調査：11月22日）
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～600mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、前年同期と同程度であった。
- ・ 魚群反応の強い海域は登別～苫小牧沖及び日高沖。
- ・ スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深400～550mにかけてみられており、とくに海底についた反応は水深450～500mが中心であった。
- ・ 水温は、渡島沖、胆振沖ともに水深50～250mにかけては平年を下回ったが（約1～4℃）、水深350m以深ではやや上回った（0.5℃）。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて広く観察されましたが、その中でも胆振沖の178・184漁区および日高沖の162・164漁区に強い反応がありました（図1・2）。
2. 渡島沖から胆振沖にかけての平均反応量は、前年同期と同程度となっていました（図3）。ただし、今年度は日高沖（Q～T線）に強い反応があり（図1）、とくにQ、RおよびT線の反応量は調査を開始した2001年度以降における最高値となりました。
3. スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深400～550mの海底上に観察されました（図4）。とくに、海底に張り付いた反応は、水深450～500mが中心となっていました（図2）。なお、苫小牧沖（J線）および日高沖（R線）には、とくに濃密な反応が観察されましたが、両線とも海底から50～100m程度離れて浮いた反応が主体となっていました（とくにR線では、海底に着いた反応は水深400～420mの狭い範囲になっていました）（図2）。
4. 今年度は時化により調査期間が短縮されたため、トロールによる漁獲調査は実施できませんでした。そのため、この調査の前後に登別沖（10月30日漁獲）および鹿部沖（11月22日漁獲）で行った刺し網漁獲物調査の結果をお知らせします。両地点ともに漁獲されたスケトウダラは、ほとんどが尾叉長40～50cmの範囲となっており、45cm前後が主体でした（図5）。なお、今年度の刺し網漁獲物には、イトヒキダラやソコダラの仲間も例年以上に混獲されているそうなので、今年度の魚探反応にはスケトウダラ以外の反応も混ざっている可能性があります。
5. 調査海域の水温は、渡島沖（D線沖）、胆振沖（H線沖）ともに、水深50～250mにかけては平年（2002～2022年度のこの調査における平均値）を約1～4℃下回っていました。ただし、スケトウダラが分布していた、水深350m以深は平年よりも0.5℃前後上回っていました（図6）。

なお、次回の調査は年明け後の1月中旬（2024年1月12～20日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

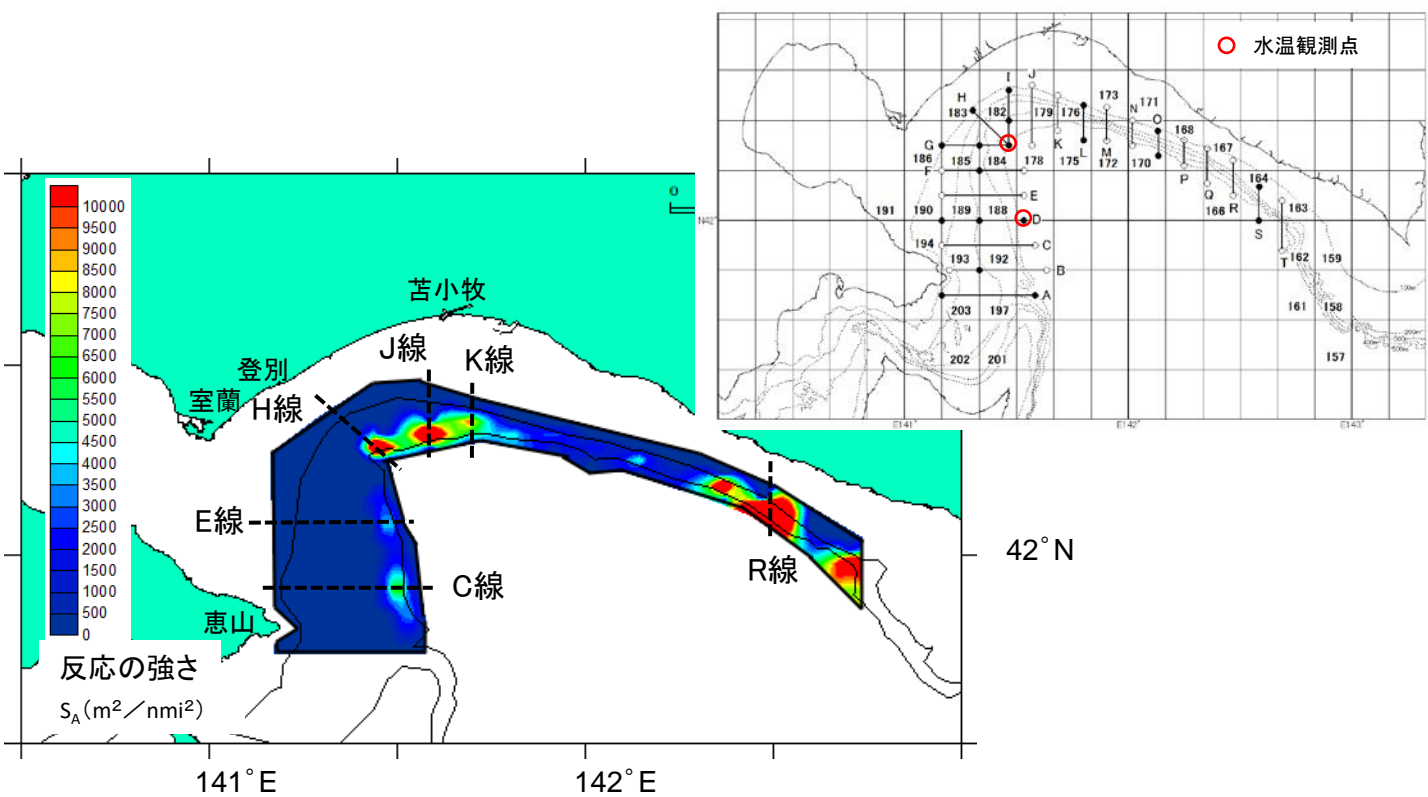


図1 調査海域における魚群の分布  
(右上図は調査海域図、右下図は前年同期の分布図)

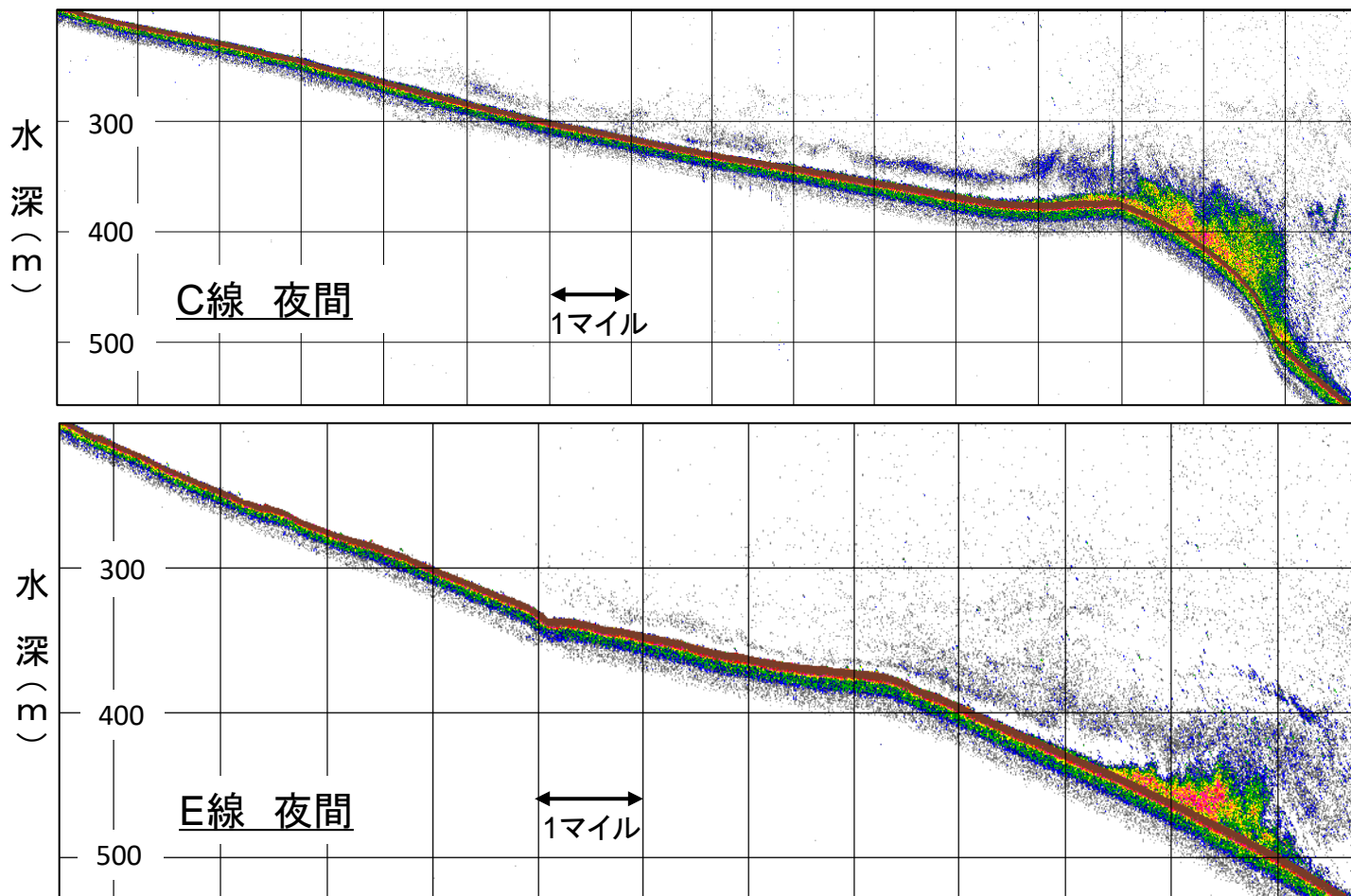


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

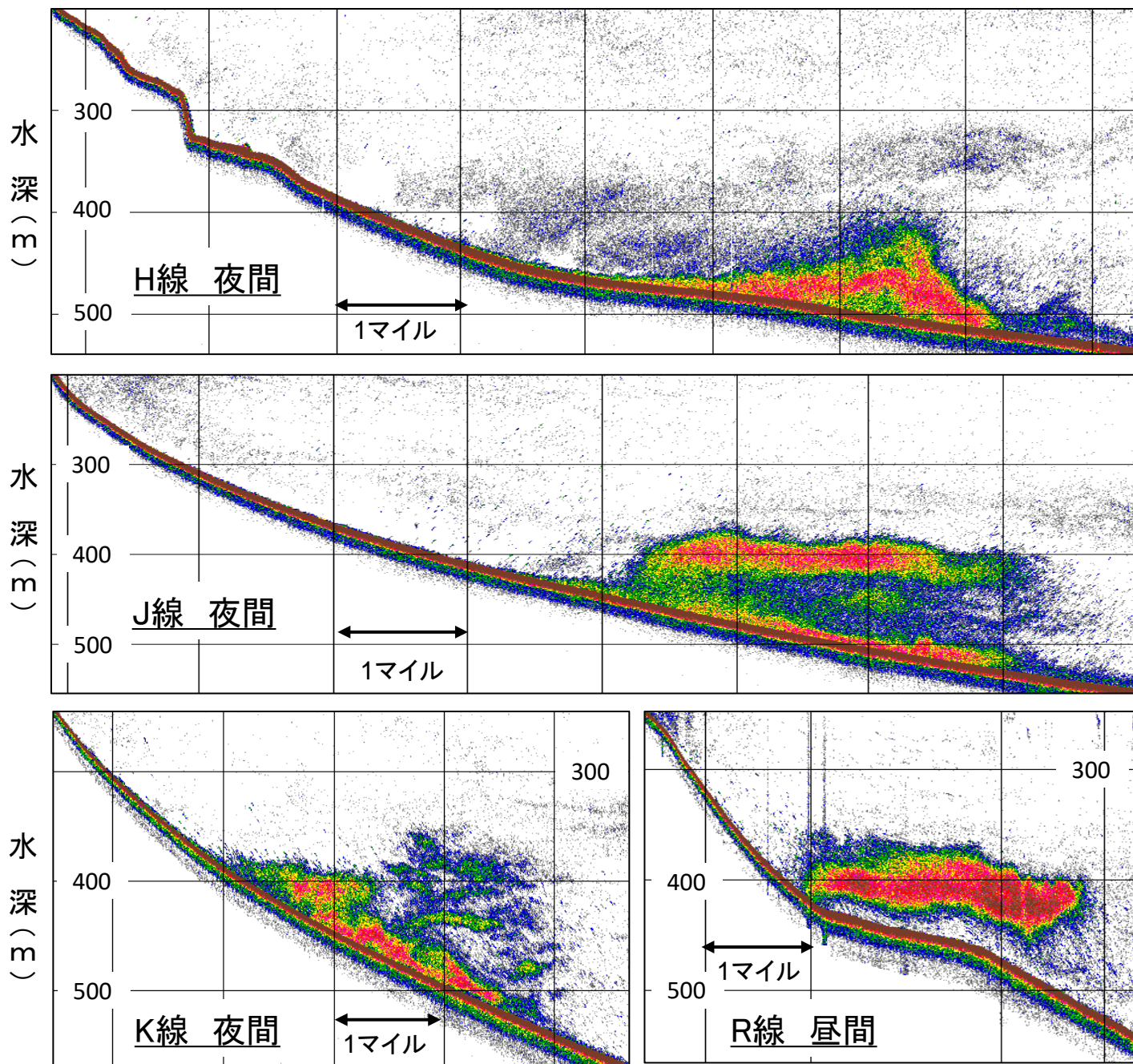


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

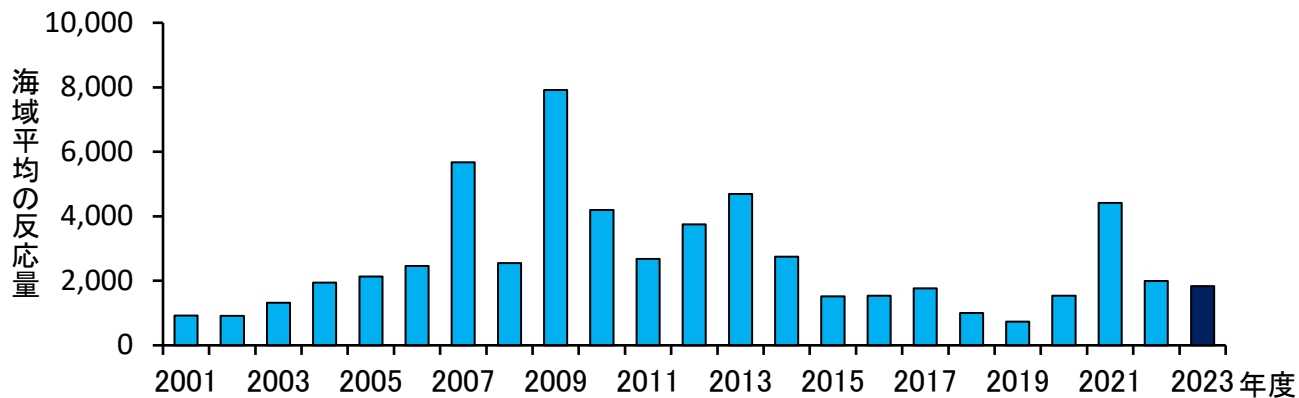


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移(1平方マイルあたりの反応量)

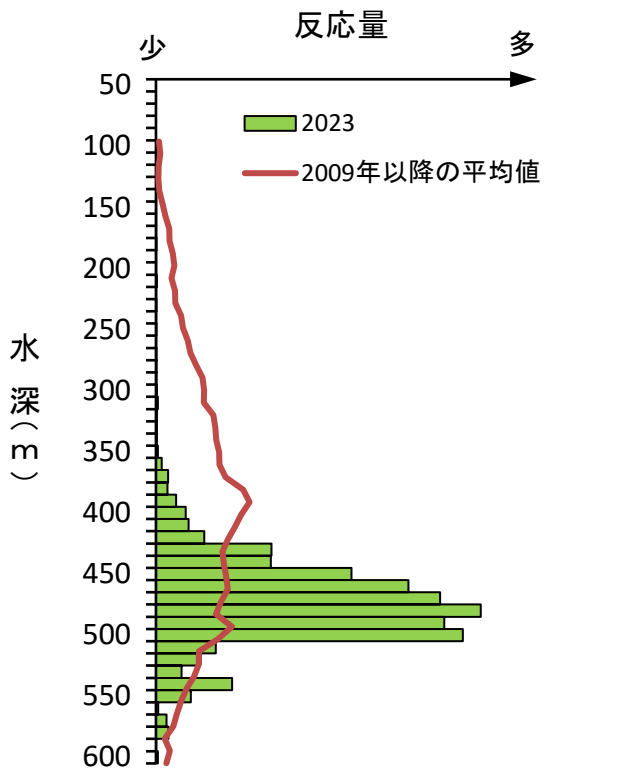


図4 水深別の平均魚探反応量(海域全体)

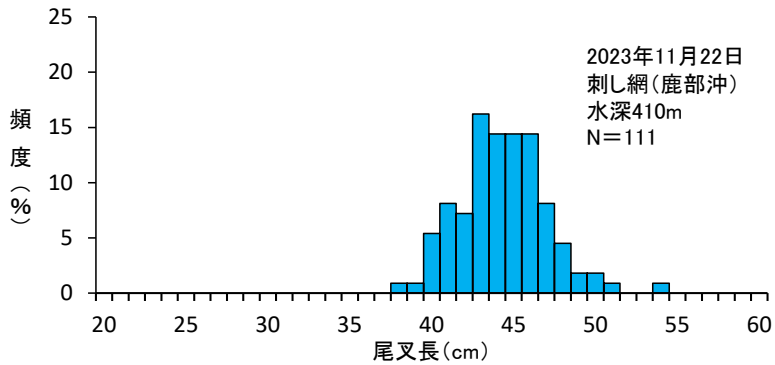
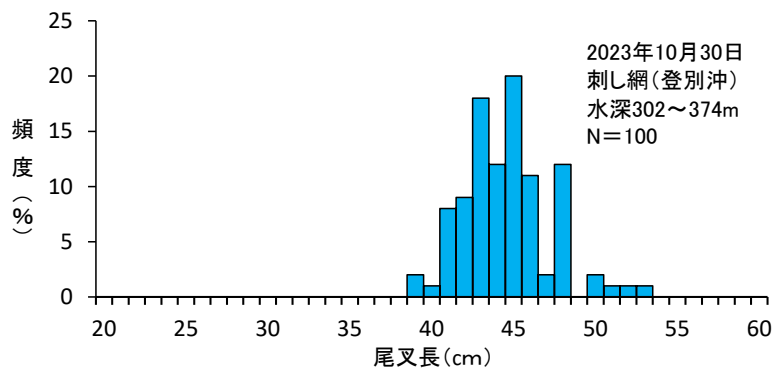


図5 スケトウダラ刺し網漁獲物の体長組成 (上:登別沖, 下:鹿部沖)

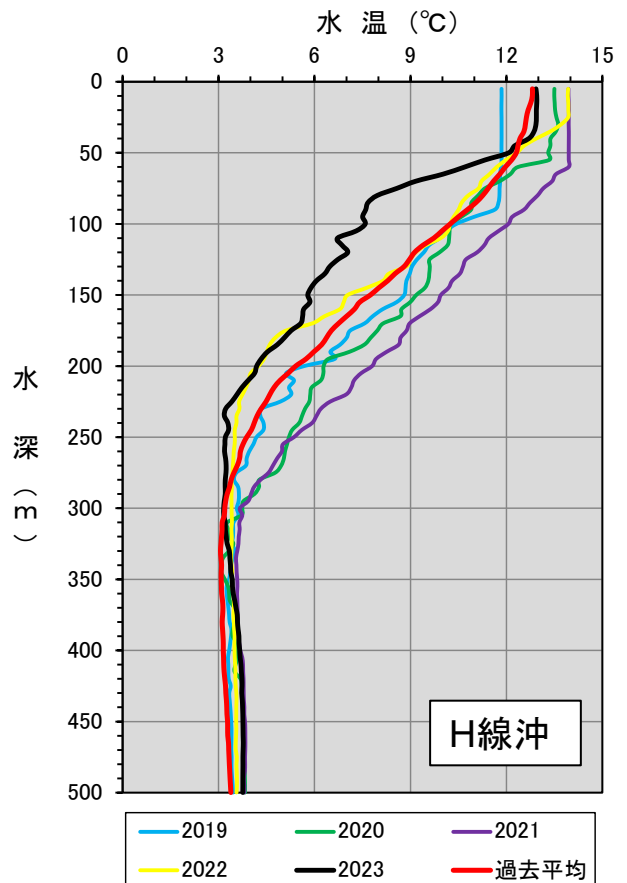
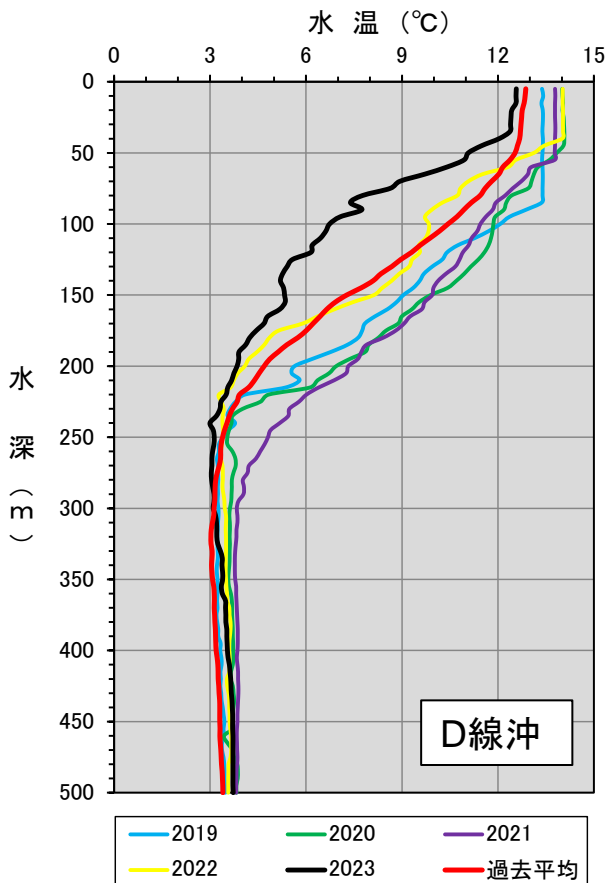


図6 11月中旬における水温の鉛直分布 左:Dライン沖(N42° ライン), 右:Hライン沖(登別沖) (過去平均:本調査における2002~2021年度のそれぞれの調査点の平均値)